

令和3年度学校関係者評価アンケートまとめ

令和3年度の学校関係者評価アンケートについては、昨年度から引き続きの新型コロナウイルス感染症の影響により、評価委員は学校行事や学校公開の参観ができなかったため、アンケート結果を基にした分析が中心となっている。なお、文中の「肯定的な評価」は、アンケートの評価「とても思う」「思う」「あまり思わない」「思わない」「わからない」のうち、「とても思う」「思う」を合わせたものの割合を示す。また、児童アンケートは、5・6年児童に実施した。今回のアンケートの回収率は、保護者対象のアンケートが90%（598／661）、地域対象のアンケートが50%（44／88）であった。

学校の教育活動についての評価は、全体的に高い傾向を維持している

- ・児童アンケートの評価項目23のうち、肯定的評価が80%を超えたもの—14項目
- ・保護者アンケートの評価項目38のうち、肯定的評価が80%を超えたもの—17項目
- ・地域アンケートの評価項目14のうち、肯定的評価が80%を超えたもの—7項目

特に評価が高かった項目は以下の通りである。

- ＜児童＞
- ・先生は、課題（めあて）について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている。【肯定的評価 95%（以下割合のみ表記）】
 - ・先生は、ていねいに指導してくれる。【94%】
 - ・先生は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。【93.7%】
- ＜保護者＞
- ・学校行事は、子どもにとって楽しい。【96.2%】
 - ・学校行事は、子どもにとって達成感がある。【95.8%】
 - ・本校の学校生活は、子どもにとって楽しい。【90.7%】
- ＜地域＞
- ・学校からのお知らせ（学校だより）などにより、学校の様子が分かる。【100%】
 - ・学校は、安全性を高めようと地域と協力している。【93.2%】
 - ・通学している子どもたちは、交通ルールなどを守っている。肯定的評価【90.9%】

昨年に比べ、地域アンケートにおける肯定的評価が80%を超える項目数が減っている（13項目→7項目）。これは、長引くコロナ禍によって直接の交流や目に触れる場面が減り、学校や児童の様子が伝わりづらくなっている部分があり、「わからない」の割合が多くなったことが一因と考えられる。可能な交流の再開の検討とともにアンケートで高評価だった学校だより等のお知らせを更に充実させてほしい。

タブレット型情報端末等ICTの活用についての情報提供

児童「先生は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。」**肯定的評価 93.7%**

保護者「本校は、映像やタブレットを工夫し、分かりやすい授業をしている。」**肯定的評価 60.4%**

保護者「本校は、様々な教育活動（オンライン授業・通常授業・各種会議等）の中で、ZoomやMicrosoft Teams、ロイロノート等のICT（情報通信技術）を適切に活用している。」**肯定的評価 67.7%**

GIGAスクール構想に基づいたタブレット端末の全員配付が実現し、様々な教科の授業での活用が進んでいく。それにより、児童は、学年に応じたソフトやアプリを活用し、意見を共有したり、まとめたりする技術を格段に成長させ、そのことを自覚している。昨年度に引き続き、タブレットの活用については、児童の評価と保護者の評価に大きな開きがある。学校は、ICTの活用を更に進めるとともに、活用の状況に関して、保護者への十分な情報提供ができるよう努めていく必要がある。

学校行事の取り組みについての児童・保護者の高い評価

児童「学校行事は楽しい。」肯定的評価 90.5% 「—達成感がある。」肯定的評価 86.8%

保護者「学校行事は、子どもたちにとって楽しい。」96.2% 「—達成感がある。」肯定的評価 95.8%

児童・保護者共に、学校行事に関して、「楽しい」「充実感がある」の項目が高い評価であった。アンケートの実施時期が、運動会後であったこともあり、コロナ禍において学校行事等が制限される中、延期の未行われた運動会に対する評価の部分が大きいであろう。前向きな気持ちで取り組む活動の教育的効果は高い。学校には、引き続きの感染予防に努めながら、できる限り児童の豊かな活動を引き出す学校行事の計画・実施をお願いしたい。

読書についての肯定的評価の捉え方と将来に向けての読書に触れる機会の更なる充実

児童「わたしは、本を読むことが好きである。」肯定的評価 60.7% あまり思わない・思わない 35.6%

保護者「子どもたちは、読書が好きである。」肯定的評価 63.4%

「読書」に関する項目については、6割程度の肯定的評価に留まっている。学校で本に触れる機会は、週1回の朝読書の時間や読み聞かせ、図書室で行う図書の時間など、ある程度確保されており、高学年ではビブリオバトルへの取り組みも行い、児童の本への興味を高める機会は多くある。本を読むことや、それによって培われる力は、将来に役立つ大切な力である。学校は、児童の現段階での本を読むことの好き嫌いだけに捉われず、今後も引き続き十分な機会を確保するとともに、本の魅力に触れて将来の読書習慣につながる活動の更なる充実を図ってほしい。

子どもたちが実感をもてるキャリア教育の推進

児童「自分の生き方や将来のことについて、考える授業がある。」肯定的評価 60.5%

保護者「本校は、子どもの生き方や将来のことについて考える授業をしている。」肯定的評価 45.2%

キャリア教育は、学校の様々な学習や活動を通して行われている。直接的に将来の生き方や職業について考える授業や活動を適切な時期・内容で実施するとともに、すでに行われているキャリア教育につながる学習について、児童が実感をもって取り組める工夫が必要ではないか。また、従来の形での保護者会等、教育活動の詳細について伝える場面が減っていることも踏まえ、新たな情報提供の形を模索していく必要もある。

学び舎の区立中学校の情報提供と学校間の連携

児童「区立中学校に関する情報が提供されている。」肯定的評価 36.8%

保護者「学び舎の区立（幼稚園）中学校についての情報が提供されている。」肯定的評価 44.8%

児童・保護者共に肯定的評価が低い。学習の情報はもちろんのこと、児童にとっては、部活動の情報など、学習以外の情報にも関心があるところであろう。コロナ禍において学び舎の直接的な交流活動が制限される中、学校は、児童・保護者に対し、適切な進路選択の材料として区立中学校の情報を更に提供するとともに、児童が中学校での学習・生活を円滑にスタートできるように学校間の連携強化に期待したい。

自己肯定感を育む教育の充実

児童「わたしにはよいところがあると思う。」肯定的評価 58.5% わからない 19.6%

自己肯定感を育むことは、これから将来に向けて成長していく児童にとって、様々な成長や人との関わりにおいて基盤となる力になるものである。約6割の児童が肯定的評価であった。また、「わからない」と答えた児童も約2割いる。この中には、自信をもって自分について表現できないだけの児童も含まれるであろう。そういう児童が「自分にはよいところがある」と堂々と表現することができるようになるには、どのような働きかけが必要なのだろうか。今後も、児童の自己肯定感を高め、それを自覚して自信をもって自ら表現できる児童の育成を目指して、家庭と連携した取り組みを行うなど、具体的な手立ての充実に期待したい。